



静脩

2000年1月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 36, No. 3

京都大学附属図書館創立百周年記念式典に際して

京都大学総長 長尾 真

京都大学附属図書館創立百周年をお祝い致します。

京都大学附属図書館は明治32年の発足以来、今日に到るまでの間に着実な発展をとげて来ました。現在学内に60余の部局図書館・図書室をもち、合計で564万冊余の図書とぼう大な資料を有する大図書館となっております。これは東京大学図書館の754万冊、国立国会図書館の713万冊に次ぐ日本第3の大図書館であり、誇りとすべきことと存じます。その活動の規模は、中央館であるこの附属図書館だけで年間の入館者75万人、年間の貸出し冊数13万点であり、非常によく利用されている図書館であります。また近年は休日も開館し、学生・研究者はもとより市民の方々にも利用していただけますし、図書館間相互貸借制度にも積極的に協力し、年間600点余を他の図書館に貸出し、また年間2万件の文献複写サービスを行っております。これらの外部に対するサービスは年々増加しており、定員削減の中での限られた図書館員の負担は益々ふえているのでありますが、国内有数の図書館としての社会的使命を認識して、サービスに努めていただいている図書館員の皆様に対し心より感謝致します。

京都大学図書館は、その創立の時点における精神が非常にユニークでありました。すなわち、



他の大学図書館においては学生を書庫に入れず、学生は教官の講義録をうつし、これを記憶することに集中していたのに対し、京都大学においては教官は学生に課題を与え、学生を図書館書庫に自由に入れ、自分で書物や文献をしらべて課題を解決させるという方法を中心とした教育をしたのであります。したがって京都大学図書館は学生の勉強において特に重要な位置を占めるものであります。

今日の大学教育の1つの問題は、学生が学問に対する積極的な興味をもたず、勉強にやる気をもたない者がかなりいるという現状にあります。これを解決するためには、学生に課題を与え問題意識をもたせ、ていねいな少人数教育を行う必要があると考えます。昨年から始まりましたポケットゼミはその1つの試みであります。ここで教官全てが京都大学創立時の教育の精神を思い返し、図書館利用を重視した教育

を行うことが必要でありましょう。そしてこのような教官の努力に呼応した図書館職員のあり方が求められていると思います。

この点からは、昨年度から始められた全学共通科目“情報探索入門”は大きな意味をもつものであると存じます。これは教官の講義と図書館員の指導する演習が内容的に1対1に対応して行われるもので、コンピュータを活用して図書館情報、データベース情報、インターネット情報などを検索する技術を教えるとともに、どのような情報や知識がどういったところにあって利用できるのかということを知ることのできるものであります。ここで特筆すべきは、演習に対して附属図書館をはじめとして多くの部局図書館の職員が積極的に参加してくれていることであります。同様の努力は附属図書館や部局図書館で半日コース程度でも行われておりますが、これらは、図書館と図書館職員の重要性を学内に広く認識してもらい、その地位を高めることに役立つとともに、図書館職員自身の研修にもなるものであり、高く評価されるべき活動であると存じます。今日においても我が京都大学図書館は開放的であります、これからの情報時代においては創立の時の図書館精神を忘れずにより一層の努力をし、その良い特徴をのばして行っていただきたいと存じます。

図書館の使命は、言うまでもなく人類の英知の結晶である書籍を代表とする情報・知識を体系的に収集し保存することであり、またこれを全ての人の自由な利用に供することです。国立国会図書館は納本制度によって国内で出版された書物は全て納本されることが原則となっていますが、その納本の金額の半額を出版社に還元しているためもあって、予算の面から全ての出版物を集めることは出来ないというのが実状であります。イギリスでは納本制度が日本よりもしっかりしていて、英国図書館だけでなく、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学、その他の大学図書館にも納本されることになっています。日本の有力図書館が700万冊程度の蔵書であるのに対し、米国議会図書館は2700万冊、ハーバード大学図書館は1400万冊、英国図書館1200万冊、フランス国立図書館1000

万冊といった数字が示すように、世界の先進国における図書館は充実しており、彼我の差は歴然としております。日本はもっと図書館に予算を与え、体系的にしっかりした収書をしてもらう必要があるのであります。

京都大学においては全体として年間に約8万冊の図書館を購入していますが、ほとんどは教官の研究費からそれぞれの教官の研究目的にあった図書館を購入しているのであり、図書館としての立場から購入すべきものがかならずしも購入されていないのであります。特に京都大学附属図書館において年間に自由に選書して購入できる書物は僅かに3000～4000冊であり、これは日本で1年間に出版される書物の10%以下の数字であります。これから国際的にも重要な地位を占めようとする大学としては全く不十分であるといわざるをえません。

研究者にとっては図書よりもさらに大切なのは雑誌であります。毎月発行される雑誌には最先端の研究成果が掲載されるからであります。京都大学図書館はこれまでの総計として約68,000種の雑誌類を持っていますが、現在毎年購入している雑誌類は国内発行誌15,000種、外国発行誌12,000種であります。しかし雑誌の購入費は年々高騰しており、限られた予算で購入できる雑誌の種類は減らしてゆかざるを得ないという困難に直面しています。これは国立国会図書館においても同様であり、我が国図書館システムの最後の砦である国立国会図書館が最近数千種の雑誌の購入をやめたのはまことに残念であり寒々とした気持ちにならざるをえません。しかしこういったことは単に日本だけのことでなく、世界中の図書館の直面している状況であり、複写サービスや電子図書館のネットワーク等による相互利用などの工夫によって切り抜けてゆかねばならないでしょう。

今日の図書館活動においては、紙を媒体とする図書資料類とともに電子媒体上の情報を無視することはできません。最近ではF D（フロッピーディスク）やC D（コンパクトディスク）などによる出版がふえて来ておりますが、これらを取り扱うしっかりしたシステムはまだ確立されていません。時代が進むにつれて種々の新し

い形式の電子媒体が出て来ますし、またどんどんと小型になってゆき、名刺の大きさよりも小さいものも出て来ています。情報媒体が小さくなってゆくのは好ましいことではありますが、図書館での取り扱いはめんどろになります。こういったことに対する対処がようやくこれから始まろうとしているところであります。



電子図書館の構築は文部省の努力によって、ここ2,3年来ようやく緒についたところであり、京都大学附属図書館においても特徴のある電子図書館を建設しつつあることは大変よろこばしいことであります。この電子図書館はインターネットを通じて広く一般社会に公開されていますので、最近1ヶ月間に60~80万件のアクセスが国内外から来ており、今後ますます増加するものと推定されています。学内向けにはオンラインで雑誌記事索引や外国雑誌目次データベースサービス、さらに35誌ではありますが外国雑誌が電子ジャーナルでサービスされるなど、種々の情報が電子的に便利に利用されています。電子図書館は今後ますます重要性を増してゆくものと考えられますが、国の財政難から数カ所の国立大学に設置されている現状以上には当面増設されないという状況でありますから、これらの電子図書館は開かれたものとしてより一層の内容の充実と出来るだけ広い範囲へのサービスを心がけねばなりません。

インターネット上の情報をどう取り扱うかということは、これからの図書館にとって重要な課題であり、インターネット上に

は文書情報だけでなく、数値情報や表形式の情報などのいわゆるデータベース情報、図や写真、映像情報、演説などの音声情報や音楽などもあり、これらが総合的に取り扱われたマルチメディア情報表現をなしております。こういった情報はぼう大でどのような目的にも利用できる可能性をもっているわけですが、一方ではあまりにもぼう大すぎ、また多様であるために、利用者が明確な目的を持ち、しっかりした検索の手段をもたないかぎり、人々を混乱に落とし入れたり、また絶望を感じさせることにもなるでしょう。

一方、情報を探索するときには意外性に注目し、これを楽しむという余裕のある態度が大切であります。こんな情報があつたのかという予想しなかった事柄を評価し、取り上げることができねばその人の世界は広がりません。したがって自分の設計にしたがった情報の取得のみならず、いわば遊び心をもつて情報に接し自分の世界を広げてゆくという形で、調和のとれた検索、図書館利用をする事を心がけることが大切でしょう。そういった態度でインターネット情報の活用にも習熟してゆくことは、一般利用者だけでなく図書館職員にとっても大切なことであります。

インターネット上の情報は多くは紙には印刷されず、また常に更新されていますので、永久保存という観点から問題は深刻であります。人類の知的財産を永久保存するという立場からは意味のある情報を選別し、著作権者の承認をえて保存するということが必要ですが、これは現在全く見通しがえられておりません。また電子的な記憶装置といえども有限であり、日に日に創造される情報を全て保存することはほとんど不可能となりつつあります。この問題をどうすればよいかは、国立国会図書館を中心として、我々大学図書館も加わって検討し、将来の方向性を出してゆくべき事柄であると存じます。

さて次の百年にむけて、京都大学図書館は何を考えねばならないかという課題は重要であります。多くの方がそれぞれに考え、これを持ちよって検討して、長期的な目標をかかげる必要があるでしょう。不十分ですが思いつくままに

ならべてみますと、次のように多くの課題が存在します。

- 1) 図書館スペースの拡張：閲覧室の拡張とともに、書庫スペースの拡大が急がれる。
- 2) 学習図書館と研究図書館への整備：総合人間学部図書館のスペースを少なくとも4～5倍に拡大し、主として学部学生のための学習図書館とすることが望まれる。また60余りある部局図書館を数個の分野図書館に統合し、これからの学際的研究にも対応できるようにする必要があるだろう。
- 3) 24時間開館：米国の主要な大学の図書館で24時間開館しているものが幾つもある。京都大学でも学生・研究者にとって図書館がいつでも利用できる頼りがいのある場所となることが必要であろう。
- 4) 図書館経費の抜本的増額：ハーバード大学などに負けない図書館とするためには現在の大学全体の図書資料購入費を数倍に拡大し、附属図書館が体系的に購入するシステムが必要となるだろう。またそれに対応して図書館員の増員が必要となる。
- 5) 電子図書館の充実：図書館の所蔵している図書資料を順次電子化してゆくとともに、大学内で創造される研究者の論文や資料・データ、その他の大学情報をできるだけインターネットに接続された電子図書館に入れ保存・活用することが必要である。また図書館が研究者の依頼をうけて電子情報取得の代行業務をすることも検討すべきかもしれない。
- 6) 総合情報センターへの脱皮：図書館が広くあらゆる情報を収集・保存し利用に供するセンターであり、教育研究に深くかわつ

てゆくものであるとすれば、総合情報メディアセンターや大型計算機センターとどのように連携協力し、また場合によってはどのような形で統合した組織となつてゆくのが良いかを、研究者、学生の立場にたつて検討することが必要だろう。

- 7) 学生、研究者に対する図書館員の積極的なかわり：図書館の自動化、電子図書館化が進むにしたがつて、図書館職員の仕事の重点は参考業務や情報探索への支援や教育の方向に移つてゆくだろう。学問分野に対応した専門性の高い司書の養成、さらにそういった職員と教官との密接なネットワークを作つてゆく必要があるだろう。人類の知的財産の多くは研究者の頭脳の中に存在しているからである。
- 8) 世界の図書館との連携：コンピュータネットワークが発達すると、当然世界中の図書館が連携するような時代がくるだろう。その第1ステップとして、たとえばカリフォルニア大学連合の図書館と協定を結び、相互利用を活発化するという努力が必要になると考えられる。

これらの課題は一朝一夕に実現できるものではありませんが、目標をはっきりと持ち不断の努力をしてゆけば、いつかは実現できるものと考えます。

京都大学附属図書館の百年をふりかえり、これを将来へむかつてのエネルギーとしていただきたく、少し乱暴な事を申し述べました。これからの附属図書館の発展を念じまして、お祝いの言葉といたします。

(ながお まこと)